學會彙報

○昭和十一年度漢文學科講義題目

周易注疏演習	諸橋教授
莊子講義	諸橋教授
經書解說	諸橋教授
周禮注疏演習	內野教授
東塾讀書記	內野教授
古禮解說	內野教授
支那道德史	服部講師
支那哲學概論	宇野教授
支那文學概論	鹽谷講師
文選講義	佐久講師
文華秀麗集・凌雲集	小野講師
漢字論	岡井講師

○本年度卒業生論文題目

易の研究	石島快隆
漢代公羊學の研究	鎌田正
中國現代詩史概觀	倉田貞美
喪服制の研究	下山田光平
日本漢文教育論	高木乾
莊子の研究	寺岡龍含
春秋左氏傳の研究	米山寅太郎
淮南子の研究	米山尙之

○本年度學會委員氏名

庶務部　小澤文四郎

研究部　松村利行、高木乾、上原好一、古澤未知男。

編輯部　米山寅太郎、田口聖一、

會計部　小澤文四郎　松下忠

○春季第一回講演會

昭和十一年、五月三十日(土)午後一時より、漢文研究室に於て、高木乾氏開會の辭のもとに催さる。來聽者は諸橋會長先生を始め、諸先生諸先輩學生會員六十餘名を數へ、盛會を極めた。

一、歐米に於ける支那學研究の一端

本學教授　文學博士　中山久四郎先生

御講演の大要、は斯文第十八編第九號に掲載せられて居りますから、就いて御參照せられん事を切

望致します。

一、六笙詩考、　學習院教授　文學博士　渡邊末吾先生

御講演の大要は、別項の如く幸に本誌に掲載することを得ました。

終つて諸橋會長の閉會の辭あり。つゞいて茶話會あり。

○春季第二講演會

六月廿日(土)午後二時より本學第二會議室に於て開催す。此の日は屢次小雨を見、至つて氣鬱陶するも、諸橋、內野、寺田諸先生を始め、會員六十名の列席を見、極めて盛會を致した。

一、開會之辭　松村利行氏

一、支那思想についての二二の思ひつき　早稲田大學教授　文學博士　津田左右吉先生

博士は右演題のもとに主として大學の格物致知に就いて講演せられた。

博士は大學の致知格物が、鄭玄以來定說のない事に端を發せられて、平天下より脩身に至る前段と、前後の關係不調和であり、道德的說明と心澤的說明と差別があるとのべられ、それが、淮南子原道訓等から取つたものである、淮南子は大體道家の思想から出たものである等、詳細に論じられて、大學が當時流行の道家の語を取つて平天下の語と結合したものであると結論せられた。

一、閉會之辭　會長　諸橋　先生

○寺田范三先生十三種注疏讀了紀念會

右講演會を終つて、五時より寺田范三先生が三年四ヶ月の長き御努力の末、十三經注疏を完全に讀破せられたるよろこびを紀念する爲、若溪會館に於て紀念晩餐會が催された。集ふ者、諸橋、內野、津田先生はじめ約三十名。小澤助手の挨拶にはじまつて、寺田生先の御苦心談、諸橋會長先生の御祝辭等あり。餐を終つて又歡談。七時會を散じた。

○第十四回研究發表會

九月廿六日、午後一時より、漢文研究室に開催。諸橋、內野、森本、熊坂、寺田、小林、原、渡邊、小島、市川、松村の諸先生、諸先輩以下、又偶九月下旬の約二週間を特別講義の爲上京せられた九州の岡井愼吾博士も出席せられ、盛會緊張裡に終始した。

一、新周故宋王魯說に就いて　學生　鎌田　正君

一、我國に於ける漢文訓讀　學生　高木　乾君

終つて、諸橋會長の御紹介により、岡井博士立つて高木君に批評を寄せられ、小林先生亦鎌田君の爲に批評を述べられた。

○內野先生教授昇格祝賀會並に岡井博士歡迎會

右研究發表を終つて後、五時より茗溪會館に、本年七月本校教授に昇格せられたる內野先生の祝賀會、並に特別講義に上京せられたる岡井博士の歡迎會を催す。折柄、降雨しきりであつたが、參會者多數を數へ、小澤助手の祝辭並に歡迎の辭あり。次いで內野生先、岡井先生交に立つて所感を陳ぜらる。諸橋先生亦立つて特に語を二先生に寄せられ、笑聲盛に起つて、和氣藹々裡に終る。

○第十五回研究發表會

十一月十四日(土)午後一時より、本學會議室に於て開催。

一、開會之辭　學生　上原　好一君

一、中國現代詩潮の一瞥　學生　倉田　貞美君

一、賴山陽全書を讀む　學生　石島　快隆君

一、喪服制の一端より見たる支那家族精神の一斷面　學生　下山田光平君

一、批評　內野教授

一、閉會之辭　學生　上原　好一君

○武內義雄博士講演會

拾月十四日、東北帝大教授武內義雄博士は上方所要の歸途、諸橋會長の紹介にて俄に本學會議室に學生を集めて講演せられた。支那學研究法につき後學に裨益極めて大であつた。何分突然の爲、之を公の會とする事の出來なかつたことを遺憾とする。

○秋季講演會

十二月五日（土）午後二時より本學第二會議室に於て開催。諸橋內野先生をはじめ會員多數の參聽を見、盛會であつた。

一、開會之辭　小澤文四郎氏

一、支那文學と必讀書　東洋大學教授　古城　貞吉先生

支那文學研究に關する全般的知識を、その豐富な學殖によつて、說かれた。誠に我々を啓發する所多かつた。先づ最初に、文學といつても氣分のものでは決してない。

その研究に入る基礎知識としては、どうしても訓詁聲音の學より入らなければならない。文字の形には說文、音韻には廣韻、訓詁には爾雅の研究をなすべく、更に金文、鐘鼎金文の學、甲骨文字の學をもあげられた。基礎知識が出來てからは、材料を出來るだけ豐富にし、識見を養はねばならぬ。材料としては先づ經史から始める。經としては普通十三經といふが、論語などは傳記といふべく五經であるとされ、毛詩・禮記を特に推稱された。史は史記と前後書とを推された。その外、子として、孟子・荀子・老子・莊子・韓非子・墨子・呂氏春秋・淮南子等をあげられた。その外楚辭文學及び賦、並に樂府・五言・駢文・文選について說明され、次に、總集として、玉台新詠・古文苑・文范英華・宋文鑑・南宋文苑・金文雅等、列集として蔡中郎集・曹子建集・李白・杜甫・王維の列集をあげられ、最後に、宋詞・明の小說・元の曲及劇・清の學朝について述べられた。

一、閉會之辭　　諸橋教授

○諸橋教授御進講紀念祝賀會（別項）

○第十六回研究發表會

二月十三日(土)午後一時より本學會議室に本年度最後の研究會を開催。諸橋內野兩教授をはじめ多數會員の來聽を得て盛會であつた。

一、敦煌本莊子郭象注十二種について　　學生　寺岡　龍含君

一、噬嗑について　　學生　芥山　尙之君

一、左傳私考　　學生　米山寅太郎君

終つて諸橋會長先生の御批評あり、つゞいて茶話會に移り、五時半散會した。

○會則變更の件

一、會則第九條「會員ハ會費年額金壹圓ヲ納ムベキモノトス」を改め「會員ハ會費年額貳圓ヲ納ムベキモノトス」となす

右昭和十二年度より適用す

理　由

我が漢文學會は創立以來五年を閱し、發展の一路を辿り既に百數十名の會員を擁するに至れり、これらの會員の勞作を發表して併せてその內容の向上發展を期する爲には會報年一回にては到底不能なる故茲に會則を變更して會費を增額し年二回會報發行してこの要求を滿たし益々會員各位の惠稿を期待し以て斯文の發展と文化への寄與を圖らんとするにあり。　以上

○昭和十一年度會計報告

自　昭和十一年二月廿五日
至　昭和十二年二月廿四日

收入		支出	
二月廿五日　現在高	一四一・二三	出版費(第四號)	一二一・四四
會費	一三二・〇〇	通信費	二一・七八
寄附金	二四・〇〇	交通費	三・七八
學友會補助金	三〇・〇〇	紙代	〇・五一
特別收入(利子、會報代)	五・八九	講演會茶菓代	一一・〇〇
合計	三三三・一二	講演者謝禮	二一・六〇
		祝賀會歡迎會費	二・〇〇
		小使手當	五・〇〇
		雜費	〇・三四
		合計	一八七・四五
		差引殘高	一四五・六七